

中原支部長 川崎 等 (S52 年卒)

中原区は、川崎市のほぼ中央にあり、多摩川沿いの沖積平野と南西の丘陵部から成り立っています。古代から橘樹郡に属し、奈良時代の条里制耕地の跡と思われる区画が小杉や今井といった地域にみとめられます。中世には稲毛庄や丸子庄の荘園が、戦国時代には後北条氏の家臣が知行地を開拓していきました。徳川家康が関東に拠点を構え、幕府が開かれると、江戸と相模国中原（現在の平塚市中原）を結ぶ中原街道の要所として小杉周辺の地域が栄えます。將軍の宿泊施設である小杉御殿がつくられ、小泉次太夫により二ヶ領用水が完成されると農作物の生産量が大幅に増えました。近代に入ると、東京の近郊農業としての役割を担い、水田の他、桃や梨などの果樹や花卉などの栽培が盛んになっていきます。中でも桃は大産地でありました。

現在の中原区のあたりは、1889（明治22）年の市町村制の施行に伴い、中原村と住吉村（区の一部は御幸村）になり、1925（大正14）年には両村が合併して中原村に、さらに1933（昭和8）年には川崎市に編入されていきます。大正末期から昭和の初めにかけて東京横浜鉄道（現在の東急）や南武鉄道（現在の JR 南武線）が開通し、さらに丸子橋が完成すると東京への往来が簡便化し、住宅や学校、病院、商店、工場など様々な開発が進み都市化していきました。戦後の高度経済成長期には、新たな道路や鉄道の整備により、武蔵小杉や新丸子、元住吉、武蔵新城、武蔵中原、向河原、平間など駅周辺を中心に活気溢れる商店

街や住宅地が広がりました。

1972（昭和47）年、川崎市が政令指定都市となり、「中原区」は誕生しました。それ以前には等々力陸上競技場が、以降に川崎市市民ミュージアムや川崎市とどろきアリーナが完成し、市民の憩いの場としての機能を併せ持つ等々力緑地公園が形成されています。現在新しい球場の建設等、公園内の再開発が進んでいます。また、武蔵小杉駅周辺の再開発も進み、高層マンションの建設は今も続いています。

現在中原区には川崎市立小学校18校、中学校8校、聾学校1校があり、友松会会員数は校外会員53名、校内会員約60名となっております。平成28年度の中原支部総会は、8月26日（金）JR南武線向河原駅そばの宝珍楼を会場に、来賓として友松会より芦川弘会長、川崎市友松会より牧田好央会長をお迎えして行われました。総勢15名が参加し、議事の承認等の後、懇親会が開かれました。諸先輩方の語りに耳を傾けたり現役の方から学校現場についての情報を伺ったりしながら、楽しいひとときを過ごすことができました。



平成 28 年度 総会参加者